

在宅看護におけるフットケアの現状と課題

西 脇 友 子¹⁾

Current status and issues of foot care in home care nursing

NISHIWAKI Tomoko

抄 録

〔目的〕訪問看護職が経験する足トラブルの現状とフットケアの実施状況を把握し、在宅看護におけるフットケアの今後の課題について検討した。〔対象者および方法〕A県の訪問看護従事者研修受講生、管理者研修受講生、8カ所の訪問看護ステーションに勤務する看護職合わせて129名に対し、「足トラブルの頻度」、「足や足爪の観察状況」、「フットケアの内容」、「フットケアに対する意見」について自記式質問紙調査を行った。

〔結果〕足爪のトラブル経験は、巻き爪、肥厚爪、爪白癬が90%を超え、足部皮膚トラブル経験では、感染症が86.6%と最も多かった。足部観察頻度は、浮腫・発赤・傷・潰瘍の有無が95%を超え、皮膚疾患の有無、血流確認、関節可動性が85%以上であった。足爪の観察頻度は爪の色、爪周囲の炎症、爪の伸び、爪・爪周囲の汚れが高かった。実施したことがあるフットケアの内訳は、普通の爪切りが96.9%と最も高く、巻き爪・陥入爪・肥厚爪は80%以上であった。爪周囲の角質除去と洗浄は、24.8%、12.4%と低かった。在宅看護におけるフットケアの必要性は100%の人が感じており、フットケアの学習希望は94.6%であった。自信を持ってフットケアを実施している人は6.2%と低かった。〔考察〕在宅療養高齢者のフットケアニーズは高いが、訪問看護職は自信が無い状態でフットケアを実施しており、学習の必要性を感じていた。フットケアに対する教育の充実が望まれる。

キーワード：在宅看護

フットケア

アンケート調査

1) 健康科学大学看護学部設置準備室

はじめに

高齢者に対するフットケアの必要性¹⁾²⁾³⁾と効果⁴⁾が報告され、2003年から「介護予防・地域支え合い事業」において「足・爪のケアに関する事業」が導入された。しかし、運動機能の向上、口腔機能の向上等の事業と異なりフットケアは介護予防事業として広がりをもていない⁵⁾。2005年の介護予防市町村モデル事業中間報告⁶⁾では「フットケアは専門性が高く、事業実施体制を確立するのは困難ではと感じた。医療的な知識がないと状態を悪化させたり、的確な判断が行えないため事故に結びつく可能性がある。」「在宅に出張できるボランティアが必要」等の意見があり、在宅においてフットケアを必要とする高齢者へのフットケア提供の困難性と継続性の難しさが指摘された。

このような現状において、在宅で暮らす要支援や要介護の高齢者のフットケアを担っているのは訪問看護職であると思われるが、訪問看護職が実施しているフットケアの報告はみあたらない。病院等の臨床におけるフットケアでは、2008年の診療報酬改定で「糖尿病合併症管理料」として算定が認められた後、各県の看護協会などでフットケアの研修が開始され、フットケアの実践状況が報告されている⁷⁾。在宅看護におけるフットケアの診療報酬の算定は認められていないが、在宅看護の対象者の多くが高齢者であることから⁸⁾、フットケアの実施率は高いかもしれない。

そこで、訪問看護職が経験する足トラブルの現状とフットケアの実施状況を把握し、在宅看護におけるフットケアの今後の課題について検討した。

1. 調査方法

調査対象者は、A県の訪問看護従事者研修受講生、訪問看護ステーション管理者研修受講生、8カ所の訪問看護ステーションに勤務する訪問看護職合わせて139名である。調査は自記式質問紙を用いて行った。訪問看護従事者研修受講生と訪問看護ステーション管理者研修受講生は、受講の最後に質問紙を配布しその場で回収した。訪問看護ステーションの対象者には、B訪問看護ステーションの管理者に各ステーションの対象者への質問紙の配布と回収を依頼した。回収率は100%であった。調査の参加者は139名で、その内の10名は在宅看護未経験者であったため、対象者から除き、129名を分析対象者とした。

調査項目は、在宅看護において経験する足トラブルの頻度、在宅看護時に行う足や足爪の観察状況、在宅看護で経験したフットケアの内容、フットケアに対する意見（必要性・学習希望等）である。

結果は単純集計し、項目毎に割合を求めた。集計にはMicrosoft Excel 2007を使用した。

調査対象者へは文書と口頭で調査趣旨を説明し、同意を得た。また、訪問看護従事者研修会、訪問看護ステーション管理者研修会の主催者であるA県看護協会と8カ所の訪問看護ステーションの管理者に文書と口頭で調査趣旨を説明し、協力を得た。

2. 調査結果

看護経験は、在宅看護経験が平均6.6（±4.9）年、最長25年、最短1ヶ月、病院等での経験は11.6（±7.3）年、最長40年、最短0年であった。

1) 在宅看護における足トラブルの経験

訪問看護職が経験した足趾の爪に関するトラブルは、巻き爪、肥厚爪、爪白癬が90%を超えていた。足部の皮膚トラブルでは、白癬やカンジダ等の感染症が86.6%と最も多く、鶏眼と胼胝も74.4%、60.5%と半数以上の訪問看護職が経験していた。足部や足趾の潰瘍、浮腫の経験も85%以上だった。（表1）

2) 在宅看護時に行う足と足趾の爪の観察

在宅看護時に行う足趾の観察では、毎回行う観察は浮腫の有無が76%と最も高く、発赤や傷、潰瘍の有無が58.1%、感染症などの皮膚疾患の有無が34.1%であった。必要時行う観察で最も高かったのは足背動脈の触知など血流障害の有無で76.7%であった。毎回行う観察と必要時行う観察を合わせると、高い順に浮腫の有無97.7%、発赤・傷・潰瘍の有無95.3%、皮膚疾患の有無89.9%、血流の確認86.8%、関節の可動性86.8%、痛み82.9%、胼胝・鶏眼の有無79.1%であった。観察したことがない項目で最も高かったのは胼胝・鶏眼の有無で、7.8%であった。（表2）

足趾の爪の観察で毎回行う項目は、爪の色と爪の伸びが共に50%を超えていた。毎回行う観察と必要時行う観察を合わせると、爪の色（95.3%）、爪周囲の炎症の有無（93.0%）、爪の伸び（92.2%）、爪・爪周囲の汚れ（89.9%）、爪の形（79.8%）、爪の厚さ

表1 在宅看護における足・足爪・足皮膚トラブルの経験頻度

		全体 n=129	
		n	%
足トラブル	外反母趾	98	76.0
足爪トラブル	巻き爪	121	93.8
	肥厚爪	122	94.6
	爪白癬	119	92.2
	他	3	2.3
	足皮膚トラブル	胼胝	78
	鶏眼	96	74.4
	感染	112	86.8
	他	6	4.7
	潰瘍	112	86.8
	浮腫	113	87.6
	靴ずれ	31	24.0
	他	4	3.1

表2 在宅看護時に行う足観察の種類別頻度

	全体 n=129				na
	毎回	必要時	時々	% 無い	
血流確認	10.1	76.7	9.3	3.1	0.8
傷・潰瘍	58.1	37.2	2.3	2.3	0.0
胼胝・鶏眼	17.1	62.0	9.3	7.8	3.9
皮膚疾患	34.1	55.8	7.0	3.1	0.0
痛み	24.0	58.9	10.9	3.9	2.3
浮腫	76.0	21.7	1.6	0.8	0.0
関節可動性	26.4	60.5	9.3	3.1	0.8

表3 在宅看護時に行う足爪観察の種類別頻度

	全体 n=129			
	毎回	必要時	時々	% 無い
色	53.5	41.9	3.9	0.0
形	21.7	58.1	10.1	8.5
大きさ	14.0	55.8	14.7	13.2
厚さ	17.8	59.7	16.3	3.9
伸び	51.2	41.1	7.0	0.0
周囲炎症	34.9	58.1	3.9	1.6
汚れ	36.4	53.5	7.8	0.8
圧痛	7.8	64.3	12.4	14.0

表4 在宅看護におけるフットケア実施状況

	全体 n=129	
	n	%
陥入爪の爪切り	106	82.2
肥厚爪の削り	105	81.4
普通爪の爪切り	125	96.9
角質除去	32	24.8
足趾周囲の洗浄	16	12.4
胼胝等角質処理	68	52.7
血行促進	59	45.7
靴下の履き方指導	61	47.3
足浴指導	51	39.5
靴の履き方指導	51	39.5
医師との連携	92	71.3

(77.5%)、爪の圧痛の有無 (72.1%)、爪の大きさ (69.8%) の順に割合が低くなった。観察したことがない項目では、爪の圧痛の有無 (14.0%)、爪の大きさ (13.2%) が10%を超えていた。(表3)

3) 在宅看護におけるフットケアの実施状況

在宅看護で実施したことがあるフットケアの内訳は、普通の爪切りが96.9%と最も高率だった。巻き爪・陥入爪の爪切りや肥厚爪の削りも80%を超える実施率であった。皮膚科医との連携も71.3%が実施していた。胼胝・鶏眼のケアは52.7%の実施率だった。リフレクソロジー等の血行促進のケアは45.7%と5割を割った。靴下のはき方の指導は47.3%、足浴、靴の選択・はき方の指導の実施率はそれぞれ39.5%で40%に届かなかった。爪周囲の角質除去や洗浄は、24.8%、12.4%と低い実施率だった。(表4)

4) フットケアに対する意見

フットケアに対する意見として、在宅看護においてフットケアは必要かという問いに

表5 訪問看護職のフットケアに対する意識

	全体 n=129	
	n	%
フットケアの必要性	129	100.0
時間の確保可能	75	58.1
フットケアに自信が有	8	6.2
フットケア専門職との連携を希望	120	93.0
学習が必要	128	99.2
学習を希望	122	94.6
フットケアに対する訪問看護職の実施責任有り	97	75.2

対しては、100%が必要だと回答した。フットケアに対する学習の必要性も99.2%と高く、実際フットケアの学習をしてみたいかという問いに対しては、94.6%がしてみたいと回答した。自信を持ってフットケアを実施していると回答した人は6.2%にとどまった。フットケアの専門職と連携を希望する割合は、93%と高かった。現在の在宅看護の状況でフットケアに時間が取れるかという質問では、58.1%の人が何とか工夫すれば取れると回答した。訪問看護職のフットケアに対する責任の有無を問うため「要介護になり爪が厚くなる、あるいは、足が変形するのは仕方がないので、痛みがなければ看護の範疇ではどうしようもないと思うか」という質問をした。75.2%の人が「看護の範疇としてどうにかしなければならないと思う」と回答した。(表5)

5) フットケア実施時の困った経験

足趾の爪切りや足のケアで困った経験を自由記載してもらった。記載の多かった経験は、巻き爪・陥入爪に関するもの28例、肥厚爪に関するもの23例、爪と爪下皮の分離が出来ないための出血9例だった。

3. 考 察

訪問看護ステーションの利用者は、平成22年の介護サービス施設・事業所調査の概要⁸⁾によれば、76%が70歳以上の高齢者で、要介護2以上が84.9%を占めている。2000年に行われた「フットケアのあり方に関する研究委員会」の調査¹⁾によれば、介護サービスの利用者の60%以上が足爪の肥厚や足変形などのトラブルを抱えていた。これらの結果は、在宅看護の対象者は要介護高齢者が多く、その多くが何らかの足トラブルを持っており、フットケアのニーズが高いことを示している。今回の調査で9割を超える訪問看護職が巻き爪や陥入爪、肥厚爪、足の皮膚感染症を経験していたことから、「在宅で療養している高齢者は、フットケアの高いニーズを持っている」ことが裏付けられた。

また、巻き爪や陥入爪、肥厚爪に対するケアの実施率が8割を超え、足や足爪の観察では、各項目の実施率が毎回実施と必要時実施を合わせると9割から7割という結果か

ら、ほとんどの訪問看護職は、足や足爪に関心を向け、フットケアを実施していることが明らかになった。

しかし、「自信を持ってフットケアを実施しているか」という問いに対して、自信を持って実施していると回答した人の割合は6.2%と低かった。また、巻き爪・陥入爪と肥厚爪のケアを行う時に必須なケアとなる足爪周囲の角質除去や洗浄の実施率は、それぞれ24.8%、12.4%と低かった。さらに、足趾の爪切りや足のケアで困った経験の記述では、巻き爪・陥入爪に関するもの28例、肥厚爪に関するもの23例と多かった。爪と爪下皮の分離が出来ないため爪切り時に出血させてしまった9例は、インシデントとして取り扱われたと思われる。これらの結果は、訪問看護職は巻き爪や肥厚爪に気づき、ケアしようと思い、上手くケアしようとする努力しているが、これで良いのか迷いながら試行錯誤していることを示している。

その要因の1つに訪問看護職のフットケアに対する知識と技術の不足が考えられる。今回の調査対象者の看護経験年数から考えると、対象者が受けた看護基礎教育にフットケアは含まれていなかっただろうし、卒後、独自でフットケアの学習をした対象者も8名と少なく、学習時間も2日から半日と短時間で、技術を習得するまでには至らなかった可能性が高い。これらのことは、訪問看護職を対象としたフットケアの学習の必要を示唆している。実際、今回の調査で、フットケアの学習が必要と感じている割合が90%を超えた。在宅看護における高いフットケアニーズに答えるため、訪問看護職にとってフットケア技術は必須の技術といえる。在宅で療養している高齢者のフットケアを安全に安楽に行うため、訪問看護職へのフットケアの知識と技術教育の必要性が明らかになった。

更なる要因としては、フットケアの専門職との連携を希望する回答が90%以上だったにもかかわらず、連携できるフットケアの専門職がほとんどいないことが挙げられる。このような現状では、フットケアの専門職と連携して在宅の高齢者のフットケアを実施するのは難しい。現在の在宅看護の状況でも5割を超える訪問看護職が何とか工夫すればフットケアに時間が取れると回答していることから、訪問看護職のフットケアに対する知識と技術を高めていくことが、在宅でのフットケアのニーズに応える近道であろう。

また、在宅で療養する高齢者や家族の傾向として、足や足爪のトラブルは命に直接かわることがない等の理由で、医療職への相談が遅れがちになり、重症化してから訪問看護職が対処する場合も多いのではないと思われる。重症化すればするほど専門的なフットケア技術が必要になるが、在宅で行う看護はほとんど単独で行うので、フットケアに自信がなくても変わってくれる看護職はいないし、相談しながらケアを行うことも難しい。このような在宅看護の持つ特徴からも、訪問看護職に対するフットケアの知識と技術の教育は、早急に企画実行されるべきである。

病院等の臨床においては2008年の診療報酬改定で「糖尿病合併管理料」として糖尿病の重症化予防のためのフットケアについて算定が認められ、標準フットケアプログラム

を基に各県の看護協会等においてフットケア研修会が開催されている。在宅看護では2009年に特別管理加算として「真皮を超える褥瘡の状態」が対象になったが、フットケアは報酬として認められなかった。訪問看護従事者研修会のプログラムに褥瘡に対する講義は組み込まれているが、フットケアの講義はない。訪問看護職に対するフットケアの教育が、どこでどのように企画され、どのようなカリキュラム内容でどのくらいの時間が必要かは、看護基礎教育においても、卒後教育においてもフットケアに対する系統だった教育がなされていないことや、研究もされていないことから今後の課題である。まずはこの課題に気づいた人々が始めなければならない。

今回の調査では、在宅で療養する高齢者のフットケアニーズは高く、訪問看護職がフットケアを担っているが、自信が無い状態で実施されており、学習の必要性を感じていることが明らかとなった。今後訪問看護職のフットケアに対する教育も含め、フットケアワーカーの育成や在宅におけるフットケアの保険点数化等施策の充実が望まれる。

〈引用文献〉

- 1) 地域保険研究会内 フットケアのあり方に関する研究委員会 平成14年度老人保健健康増進事業
フットケアのあり方に関する調査報告書, 2003.
- 2) 山下和彦他: 高齢者の足部・足爪異常における転倒への影響. 電気学会論文誌 124 (10), 2057-2063,
2004.
- 3) 姫野稔子他: 在宅後期高齢者の転倒予防に向けたフットケアに関する基礎的研究. 日本看護研究学会
雑誌 27 (4), 75-84, 2004.
- 4) 宮川晴妃編 山下和彦: データでみるメディカルフットケアの有効性 疾患・転倒・寝たきり予防に
も役立つメディカルフットケアの技術. 日本看護協会出版会, pp11-113, 2003.
- 5) 平成20年度介護予防事業(地域支援事業)の実施状況に関する調査結果 厚生労働省老健局老人保健
課
- 6) 介護予防市町村モデル事業中間報告平成17年4月19日 厚生労働省老健局
- 7) 特別委員会「糖尿病重症化予防(フットケア)研修推進委員会」: 日本糖尿病協会・看護学会主催フ
ットケア研修修了者のフットケア実践状況と今後の課題. 日本糖尿病教育・看護学会誌 15 (1), 36-45,
2011.
- 8) 平成22年介護サービス施設・事業所調査結果の概況 厚生労働 [http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/
24-22-2c.html](http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/24-22-2c.html)

Abstract

Purpose: To ascertain the current status of foot problems and the status of foot care experienced by visiting nurses and to examine future challenges related to foot care. Subjects and methods: The study sample consisted of 129 individuals who were visiting nurse trainees administrator trainees, and nurses working at eight different home-visit nursing stations in Prefecture A. The subjects completed a self-administered questionnaire, "the frequency of foot problems," "state of foot and toenail examinations," "content of foot care," and "opinions about foot care." Results: The most common toenail problems were toenail curvature, thickened toenails, and tinea unguium, which were encountered by > 90% of the subjects. The most common skin problem of the foot that the subjects observed was infection at a rate of 86.6%. Examinations of the foot for the presence or absence of swelling, redness, wounds, and ulcers were conducted by > 95% of the subjects, and the presence or absence of skin disorders, blood flow, and joint mobility were examined by > 85% of the subjects. The most common toenail observations were nail color, periungual inflammation, toenail growth, and dirt on and around the toenails. The most common foot care provided was regular nail clipping at a rate of 96.6%, followed by care for toenail curvature, ingrown nails, and thickened nails, at a rate of > 80%. Rates of periungual exfoliation and cleaning were low at 24.8% and 12.4%, respectively. Foot care was considered to be necessary as part of home care by 100% of the subjects, and 94.6% expressed the desire to learn more about foot care. Few subjects (6.2%) provided foot care with confidence. Conclusions: Elderly individuals receiving home care have strong need for foot cares; however, visiting nurses currently provide foot care without confidence and consequently feel the need to learn more about it. Therefore, we recommend that foot care training for visiting nurses be improved.

Key words : Home-visit nursing

Foot care

Questionnaire